

育苗期間は寒暖差が大きいことから、適切な温度管理と水管理が大切となります。昼間の高温に注意するとともに夜間の低温にも気を付けましょう。基本技術を守り、根張りのある良い苗で米作りをスタートしましょう。

浸種・催芽

- ①浸種は種子を一齐に発芽させるために大切な作業です。屋内または日陰にて適切な水温(10℃～15℃)を確保できるよう温度計で確認をしましょう。
- ②浸種期間は積算水温(平均水温×日数)で100℃が目安です、平均水温が15℃の場合7日間です。
- ③薬液消毒種子の場合は浸種してから3日間は水を交換せず、その後は酸素供給のため2～3日ごとに水を交換しましょう。
- ④催芽は芽長を揃えるために大切な作業です。水温は30℃～32℃に設定して行います。催芽は鳩胸程度とし、芽が出過ぎないように、種子の状態をよく見ながら行いましょう。



鳩胸状の種子

ご注意

令和5年の夏は高温に経過したため、令和5年産種子は「休眠」が深く、一齐に発芽しにくい可能性があります。上記を参考に十分に浸種・催芽を行い、鳩胸状になったのを確認してから播種してください。

滋賀県種子センターのお知らせは、ホームページよりご確認ください



育苗管理

- ①育苗期間の適温は次のとおりです。ハウス内の育苗箱付近の高さに温度計を設置し、こまめなハウスの開閉により温度管理に努めましょう。

育苗期間の適温(ビニルハウス)

	出芽期 2～3日	緑化期 2～3日	硬化期 4～16日
昼間	30～32℃	22～25℃	18～20℃
夜間	30～32℃	15～18℃	12～15℃

- ②緑化期以降は1日に1～2回を目安にかん水を行います。夕方のかん水は根張りが悪くなるので控えましょう。また、かん水量が多すぎると苗が徒長して、根が生育不良となるので注意です。

プール育苗

プール育苗は、育苗のパイプハウス内にビニールを用いて簡易のプールを作り、苗を管理する技術です。従来の育苗におけるかん水作業とハウスの開閉管理の省力化が可能です。

「育苗の方法」

- ①水平な置き床にビニールシートを敷き、5cm程度に湛水できるプールを作ります。
- ②播種後または出芽後の育苗箱をプール内に並べて、必要に応じてプール内に水を入れて管理します。
- ③入水開始は緑化終了後、床土がやや乾き始めた時期です。水管理に必要な作業は、水道の蛇口の開閉だけで、4～7日に1回程度です。
- ④ハウス内の温度はできるだけ低め(最高温度で25℃以下)に管理し、最低気温が4℃以上の場合は、原則として夜間もサイドビニールを開放状態にします。

